

礼忠簡と徐宗簡研究の展開

——居延新簡の発見を契機として——

はじめに

- 一 従来の諸研究
 - 二 研究の展開
 - 1 累重訾直官簿
 - 2 吏の任用と資産
- むすびにかえて

はじめに

中国内蒙古自治区の西方、エチナ河流域の漢代烽燧の遺址で発見された一群の木簡を、居延漢簡と総称している。この居延漢簡は、発見の時期によって二つのグループに大別される。すなわち一つは、一九三〇年～三一年にかけてS・ヘディンの率いる西北科学考察団の団員F・ベリイマンが発見した約一万枚の木簡である。そして二つには、一九七三年～七四年にかけて中国甘肅省文物古研究所や甘肅省博物館等によって組織された居延考古調査隊が発見した約二万枚の木簡である。そのために現在では、前者を居延旧簡と呼び、後者を居延新簡と呼んで区別している。

さて居延漢簡が漢代史研究の第一等史料であることは、贅言を要し

永 田 英 正

ないだろう。それは全体として極めて貴重な史料であるが、しかし中には単独で注目される著名な木簡がいくつかある。その代表的なものが、居延旧簡中の一般に礼忠簡、徐宗簡と称している二枚の木簡である。この二枚は、辺境に勤務する吏の資産や家族構成が記載されており、いずれも興味ぶかい内容によって内外の漢簡研究者のみならず、漢代史研究者の間でも広く知れわたっているところである。しかしそのように周知の木簡にもかかわらず当該木簡の作成目的や用途や働き等々を含めて、いわゆる木簡の性格については、従来からいろいろと論じられながら未だに定説を見ていない。そのために折角の貴重な史料も漢代史研究史料として十分に活かされることなく、中途半端な状態におかれたままであったが、近年に至り居延新簡の発見によって新たな展望が開けてきた。そこで本論文では、先ず礼忠簡と徐宗簡についての従来の諸研究を概観し、ついで居延新簡による研究の展開と、併せて関連する問題点を述べてみたい。なお本論文は一面では中国木簡研究の研究史でもあり、そこに見られる研究の難しさの一斑を浮き彫りにするものである。

一 従来 の 諸 研 究

先ず初めに礼忠簡と徐宗簡の各釈文を示しておく。居延旧簡の最初

の釈文である勞幹『居延漢簡考釈、釈文之部』（石印本、四川南溪、一九四三年。排印本、上海商務印書館、一九四九年）によると、礼忠簡は次の簡1、徐宗簡は同じく簡2の通りである。

簡1 候長饒得広昌里公乘礼忠年卅

小奴二人直三万 用馬五匹直二万 宅一区万
大婢一人二万 牛車二両直四千 田五頃五万 三七・三五^①
軺車一乘直万 服牛二六千
・凡豭直十五万

簡2 二堪燧長居延西道里公乘徐宗年五十

妻妻 宅一区直三千 妻一人
子男一人 田五十畝直五千 子男二人 二四・一B
男同産二人 用牛二直五千 子女二人
女同産二人 男同産二人 女同産二人

右の簡1礼忠簡であるが、上段簡頭の候長は官職名で辺境の末端組織である燧を統轄する責任者、饒得広昌里は本籍地、公乗は爵位、礼忠は姓名で年齢は三十歳であることを大書する。ついで第二段目以下には奴、婢、軺車、用馬、牛車、服牛、宅、田の各数量と価格を記し、最下段末尾に「・凡豭直十五万」として豭すなわち資産の合計金額を記して締め括っている。簡2の徐宗簡も礼忠簡と同様に上段簡頭から徐宗の官職名、本籍地、爵位、姓名、年齢を大書し、第二段目以下には家族構成と人数および宅、田、用牛の数量と価格を記す。なお礼忠簡や徐宗簡の呼称は、いずれも簡文中に見える人物の姓名から付けられたものである。

さてこの簡1の礼忠簡と簡2の徐宗簡を最初に注目して取り上げたのは、陳槃「由漢簡中之軍吏名籍説起」（『大陸雜誌』二一八、一九

五一年。同氏『漢晋遺簡識小七種』所収）である。陳槃氏によると、礼忠簡も徐宗簡ともに軍吏の戸籍であり、そこに資産や家族を記しているのは、戸籍が算賦（人頭税）や財産税徴収の基礎となったからであるとする。但し、人頭税を徴収するためには年齢の記載がなくてはならないが、そこに妻子の年齢の記載がないのは、軍吏の戸籍にも用途によって幾種類あり、この場合は年齢には重点がおかれず、適宜これを省略したものであらうと考えた。

右の陳槃説を批判して自説を展開したのが平中荅次「居延漢簡と漢代の財産税」（『立命館大学人文科学研究所記要』一、一九五三年。同氏『中国古代の田制と税法』所収）である。ここでは先ず陳槃氏の戸籍説について、一般に戸籍には家長および家族の本籍地・爵位・氏名・性別・年齢・形状・統柄等が記されている筈であるが礼忠簡と徐

宗簡ともにそれが記載されていないとして、戸籍説を否定する。そして漢代には貨産（財産税）・口算（人頭税）・繕算（繕銭税）・車算（車税）・舟算（舟税）・畜算（家畜税）など銭で納める税すなわち算賦が徴収されたが、これらは全て納税者自らが資産や家族の口数など課税対象物の明細を申告することになっていた。礼忠簡と徐宗簡はまさにその申告書に他ならなかった。但し、徐宗簡に家族の口数を記して上段に妻および子男一人・男同産二人・女同産二人を挙げているのは十五歳以上の人頭税である口算の課税対象者であり、下段にその他に子男一人・子女二人を挙げているのは十四歳以下の未成人の人頭税である口算の課税対象者であろうとする。これにたいして礼忠簡に家族や口数の記載が見えないのは、礼忠は候長すなわち百石の有秩の軍吏であって一般の民に課せられる口算を負担せず、また家族も同様に口算を免除されたものであらうと考えた。

礼忠簡と徐宗簡に関する初期の代表的な研究と言うべき陳槃氏と平中氏の論文の要点は、およそ右の通りである。中でも平中氏の両簡を以て算賦の申告書だとする説は特に日本の研究者の注目するところとなり、そのうち米田賢次郎、宇都宮清吉、佐藤武敏、楠山修作等の諸氏が取り上げて論じ、平中説にたいする疑問や問題点、更には否定的な見解さえも提起されたが、いずれも決定的なものではなかった。

ところで、ここで一つ注意しておきたいことがある。それは、陳槃氏も平中氏も、いずれも取り上げた礼忠簡と徐宗簡は先の簡1と簡2の如く勞榦氏の釈文に全面的に依拠していたということである。具体的に言えば、たとい写真であれ両簡の本来の姿を全く知ることなく、勞榦氏が木簡の隷書を釈読して楷書体におきかえた釈文を唯一の手掛

りとして研究が進められてきたことである。ところが一九五七年に居延旧簡の写真版（勞榦『居延漢簡、図版之部』台北、中央研究院歷史語言研究所）が公刊されて旧簡全体の姿を見るに至り、その時点までは全く知ることのなかった事実が初めて判明したのである。それは徐宗簡で、従来これを勞榦氏の釈文どおりに完全な文書と信じ込み、過去にさまざまな苦心の解釈が試みられてきたのであるが、写真を見ると徐宗簡は習書簡すなわち手習いをした木簡であって、正式な内容の木簡ではなかったのである。図1は礼忠簡、図2は徐宗簡である。

これは特に出土文字資料が公にされる場合に言えることであるが、先ず最初に釈文が公刊され、その後やがて写真版が公開されるという一般的な事情によるものであり、一九五七年以前に写真を見ることが出来なかったのは止むを得ないことであって、勿論研究者には責任はない。しかしこのことは一面において、出土文字資料を材料とした研究では釈文を重視し、釈文のみに頼るという研究法に大きな落とし穴のあることを現実に教えるものであった。木簡研究の危険と難しさの一つはここにある。慎重を要する点である。

さて居延旧簡の写真が公開されたことから、従来の諸研究の再検討が迫られたことは言うまでもない。問題となるのは勿論徐宗簡である。しかしその際に留意しなければならないことがある。それは何かと言うと、徐宗簡が習書簡であることは疑いないが、しかしそれは他の多くの習書簡に見られるように一字や二字の文字や短い文言を繰り返して練習したものではなく、明らかに或る様式に基づいた文書ないしは記録を下敷に習書していたということである。では徐宗簡は本来何を書こうとしていたのか。若し徐宗簡が完全であれば、それは如何な

窓 史 内容、如何なる種類の文書もしくは記録であったのかを改めて問

直す必要が生じて来た。そしてこの問題を真正面から取り上げたの

が、拙論「礼忠簡と徐宗簡について——平中氏の算賦申告書説の再検

討——」(『東洋史研究』二八・二・三、一九六九年。拙著『居延漢

簡の研究』所収)である。内容の詳細については拙論に譲り、要点を

先ず手続として、通行している勞榦氏の礼忠簡と徐宗簡の积文を、

写真に照らして訂正した。それが次の簡1'、簡2'である。

簡1' 候長饒得広昌里公乘礼忠年卅

小奴二人直三万

用馬五匹直二万

宅一区万

大婢一人二万

牛車二兩直四千

田五頃五万

・凡嘗直十五万

妻妻

妻一人

簡2' 三燠燧長居延西道里公乘徐宗年五十

徐宗年五十

子男一人

田五十畝直五千

男子二人

子男二人

男同産二人

用牛二直五千

子女二人

女同産二人

男同産二人

女同産二人

そして問題の徐宗簡については、筆蹟からして同一人の手になるものだと判断し、墨色の濃淡を時間の先後によるものと見て習書の部分

を削除して、本来の姿に修正した。それが次の簡2''である。

妻

宅一区直三千

簡2'' 三燠燧長居延西道里公乘徐宗年五十

子男一人

田五十畝直五千

男同産二人

用牛二直五千

女同産二人

このような一連の手続の結果、徐宗簡に記録しようとしたのは燧長徐宗の家族構成と資産であったと考えた。ついで一部訂正した礼忠簡

(簡1')と修正した徐宗簡(簡2'')に基づいて口算の問題、官吏とその

家族の税役免除の問題、算賦の問題、申告や算簿の問題等にわたっ

て平中説に検討を加え、結論として礼忠簡と徐宗簡は吏の資産や家族

構成を記録した様式の異なる二種類の吏の身上書であり、平中説の如

くこの両簡を以て財産税や人头税などのいわゆる算賦の申告書だとする考えには、尚問題があるとした。これは、どちらかと言えば軍吏の戸籍にもその用途によって幾つかの種類があったとする陳槃説に近いものである。

しかし右の拙論とても一つの仮説にしか過ぎず、これで論争に決着がついたわけではない。したがって礼忠簡と徐宗簡の性格をめぐって

は、算賦申告書説と吏の身上書説の二つが依然として並存したまま持ち越されていたのである。そしてこのような研究の膠着状態に展望を開いたのが、居延新簡の発見であった。

二 研究の展開

1 累重警直官簿

本論文のはじめにも述べたように、中国甘肃省文物考古研究所や甘肃省博物館等によって組織された居延考古調査隊が一九七三年～七四年にかけて居延旧簡の出土したエチナ河流域を再調査し、約二万枚の木簡を発見した。これがいわゆる居延新簡である。この居延新簡のうち破城子（甲渠候官遺址）出土の約八千枚については、先ず釈文『居延新簡、甲渠候官与第四燧』（文物出版社）が一九九〇年に出版され、ついで一九九四年に至って写真版『居延新簡、甲渠候官』（中華書局）が公刊された。そしてこの中に問題の礼忠簡と徐宗簡に関係があると推察される表題簡が見出されたのである。すなわち

簡3 第二燧長、建平五年二月、累重警直官簿 EPT四三・七三^③
とある累重警直官簿がそれである。なお第二燧長は官職名、建平五年（前二年）二月は当該簿書の作成年月である。この累重警直官簿で何よりも注目されるのは、礼忠簡で見えてきた警直の語が見えることである。このことは礼忠簡が簡3の如き表題簡と関係のあることを示唆する極めて有力な証拠である。次に累重であるが、これは『漢書』六九、趙充国伝に充国が屯田の利を述べた上奏文中に

臣愚以為屯田内有亡費之利、外有守禦之備、騎兵雖罷、虜見万人留

田為必禽之具、其土崩婦德、宜不久矣。……又見屯田之士精兵万人、終不敢復將其累重還歸故地
と見えており、顔師古は

累重謂妻子也（累重は妻子を謂うなり）

と注をつけている。同様に『漢書』九六下、西域伝下にも

桑弘羊与丞相御史奏言、……臣愚以為可遣屯田卒詣故輪台以東……

田一歲、有積穀、募民壯健有累重敢徙者詣田所

とあり、顔師古の注にも

累重謂妻子家屬也（累重は妻子家屬を謂うなり）

とあって、累重とは妻子家族を指す語であったことが知られる。ところが同じ『漢書』九四上、匈奴伝上の

「天漢四年」漢使貳師將軍六万騎、歩兵七万、出朔方……匈奴

聞、悉遠其累重於余吾水北
とある累重に顔師古は注を付して

累重謂妻子資産也（累重は妻子、資産を謂うなり）

と説明している。これによると累重の中には妻子のみならず資産も含まれていたことになる。累重警直官簿のうち警直は既に簡1によって不動産と動産を含む資産価額であることが知られている。そうすると累重の中に含まれる資産とは一体何を指すのか、問題となる。そこで今、改めて『漢書』本文中の累重と顔師古注とを見てみると、累重はいずれも住まいを移すことに関係して見えており、その場合に注で累重を妻子家族としているのは趙充国伝と西域伝で、前者は羌族を、後者は漢人を対象としている。ところが累重を妻子の他に資産も含むとした注は匈奴伝で、しかも対象になっているのは匈奴である。この

窓 ことから考えられるのは、顔師古の頭の中には匈奴即遊牧生活という

史 概念があり、彼らが移動する際には家族とともに所有する動物を伴う

ところから、動物を特に資産と捉えて注記したものではなからうか。

したがって、累重に資産を含むするのは匈奴にのみ見られる例外であり、私見よりするに、累重の本義は妻子家族であると考ええる。また

官簿は、文字どおりには政府の簿書の意味であるが、『漢書』八四、

翟方進伝に「陳威、逢信官簿、皆在方進右」として、陳威と逢信の両

名の官簿はいずれも翟方進の上位にあった、と見えている。この記事

からすると、個人の記録簿を官簿と称したことが知られる。

以上の考察から、簡3の累重警直官簿とは妻子家族と資産およびそ

の価額を記した個人の記録簿を意味し、簡3は全体として第二燧長某

個人の建平五年二月時点におけるそうした記録簿の表題簡ということ

になる。このように見てくると、問題の徐宗簡はその記載内容からし

て正に徐宗の累重警直官簿そのものである。また礼忠簡は警直のみあ

って累重を欠いてはいるが、これも広い意味で累重警直官簿の中に含

まれると考えて差し支えないであろう。

この累重警直に関係のある簡は、居延新簡中には他にも次のような

ものがある。

簡4 第卅三燧長、始建国元年五月、伐閼警直累重官簿

EPT一七・三

簡5 始建国天宝一年六月、宜之燧長張憚、伐閼官簿累重警直

EPT六・七八

簡6 甲溝、累重警直伐閼簿

EPT六五・四八二

簡7 始建国二年四月、丙申朔丁巳

警直伐閼簿一編、敢言之 EPT七・九

簡4も先の簡3と同じ表題簡で、第三十三燧長の始建国元年（九

年）五月時の伐閼警直累重官簿とある。簡5も表題簡である。始建国

天宝一（元）年（一四年）時の宜之燧長である張憚の伐閼官簿累重

直とある。簡6は上下を欠いているが表題簡と見てよいだろう。また

甲溝は甲溝候官のことで、甲渠候官の王莽時代の称呼である。したが

ってこれは表題簡とは言っても先の簡3と5までがいずれも燧長個人

の簿書であるのにたいして、甲渠候官という機関に所属する該当者全

員の記録を一括した簿書の表題簡ということになる。簡7は始建国二

年（一〇年）四月二日付で警直伐閼簿一通を送付した上達文書であ

る。出土地が破城子すなわち甲渠候官の遺址であるから、甲渠候官に

所属する吏が候官に宛てて送ったものか、そうでなければ甲渠候官か

ら上級機関の居延都尉府に送った際の控えである。

ところで右の簡3から簡7までを見ると、簡3を除く他の4枚の簡

にはいずれも伐閼の文字が記されている。伐閼の語は史書の中にも見

えており、たとえば『史記』一八、高祖功臣侯者年表序に

太史公曰、古者人臣功有五品。以德立宗廟定社稷曰勲、以言曰勞、

用力曰功、明其等曰伐、積日曰閼（太史公曰く、古は人臣の功に五

品あり。徳を以て宗廟を立て、社稷を定めるを勲と曰い、言を以て

するを勞と曰い、力を用いるを功と曰い、其の等を明らかにするを

伐と曰い、日を積むを閼と曰う）

とある。また『漢書』六六、田千秋伝に

田千秋無他材能學術、又無伐閼功勞（田千秋は他の材能學術無く、

また伐閼功勞無し）

とあり、顔師古は伐閬に注をつけて

師古曰、伐積功也、閬経歴也（師古曰く、伐は功を積むなり、閬は経歴なり）

と説明している。また

簡8 □元延元年、遠備甲渠令史伐閬簿 二五八・一一

は伐閬簿という簿書の表題簡である。伐閬簿については大庭脩氏に研究があり、それによると伐は功を積むこと即ち功、閬は日を積むこと即ち勞（勤務日数）と解釈し、伐閬簿とは功と勞に基づく吏の経歴を記した簿書とする。

簡9 居延甲渠候史公乘賈通、中功一勞一歳九月□日 □

EPT五六・九九

簡10 □都尉丞何望、功一勞三歳一月十日、北地北部都候杜旦、功

一勞三歳□□ 三三六・一三三三六・一二

簡9は個人の功と勞を記したもの、簡10は吏の功と勞を列記した例である。これよりして、たとえば簡4の伐閬皆直累重官簿とは、家族や資産と価額の他に、吏の功と勞とを記載した簿書ということになる。簡5と簡6も、これと同様である。

さて以上見てきたように、居延新簡の発見に伴い累重皆直官簿という簿書の存在から、徐宗簡は累重皆直官簿に相当し、礼忠簡も広い意味で該簿に包括されるものであることが判明したのは、大きな収獲であった。そして更に注目すべき重要なことは、この累重皆直官簿が吏の功と勞とを記した伐閬簿とセットになっているという事実である。

伐閬は右に述べた如く純粹に吏個人の経歴である。そのような吏の経歴とセットになっている累重皆直官簿は、税の申告や課税とは無関係

であることは明らかである。したがって取り上げた礼忠簡と徐宗簡はいずれも吏の身分や資格、更には任用等に関係のある身上記録と見るべき性質のものである。

では何故、吏の身上記録の中に資産を記載する必要があったのか。次節でこの問題を考えてみたい。

2 吏の任用と資産

秦漢時代において吏になるためには、一定の資産を有することが条件であった。韓信は家が貧しくて暮らしが立たず、人に寄食していたために吏になれず、他方自作農出身の劉邦は農業は性に合わないが家業を放り出して放蕩三昧の生活に明け暮れながら吏に取り立てられ、泗水の亭長となって出世していくエピソードは、その間の事情をよく伝えている。

漢の景帝の後元二年（前一四二年）には、吏になるための資産の下限を一〇算から四算に引き下げる詔が發布されている。すなわち『漢書』五、景帝紀の後元二年五月の条に

詔曰、人不患其不知、患其為詐也。不患其不勇、患其為暴也。不患其不富、患其亡厭也。其唯廉士、寡欲易足。今訾算十以上乃得宦、廉士算不必衆。有市籍不得宦、無訾又不得宦、朕甚愍之。訾算四得宦、亡令廉士久失職、貪夫長利（詔して曰く、人は其の知らざるを患えず、其の詐を為すを患えよ。其の勇ならざるを患えず、其の暴を為すを患えよ。其の富まざるを患えず、其の厭くこと亡きを患えよ。其れ唯だ廉士は、欲寡くして足り易し。今、訾算十以上は乃ち宦を得るも、廉士の算は必ずも衆からず。市籍有るものは宦を得

ず、訾無ければ又宦を得ず、朕甚だ之を愁む。訾算四にして宦を得せしむ。廉士をして久しく職を失わしめ、貪夫をして利を長ぜしむること亡かれ)

とあり、顔師古の注に応劭を引いて

応劭曰、古者疾吏之貪、衣食足知榮辱。限訾十算乃得為吏。十算、十万也。賈人有財不得為吏、廉士無訾又不得宦、故減訾四算得宦矣(応劭曰く、古は吏の貪を疾む、衣食足りて榮辱を知る。訾を限り十算にして乃ち吏と為るを得たり。十算は十万なり。賈人は財有るも吏と為るを得ず、廉士は訾無く又宦を得ず。故に訾を減じて四算にして宦を得せしむ)

とある。この応劭の注によると、十算は十万すなわち一算は一万で、従来吏になる資格として十万錢の資産を所有することが必要であったが、広く清廉な人材を求めるために資産の額を四万錢に引き下げたというのである。このことは、いずれにしても吏となるには一定の資産を有することが必要条件であったことを示している。同様な事例は木簡の中にも見ることが出来る。

簡11 □年廿八 富史有鞍馬弓櫛、願復為候史□ 二一四・五七

これは百石以下の少吏の場合であるが、年齢二十八歳の某は富史で、鞍馬と弓櫛(弓入れ)を所持しており、候史の官職に復帰することを願ひ出ているという意味である。富史とは資産を有する史(書記)のことで、その彼が更に鞍馬と弓櫛を所有していることを有資格者の条件として願ひ出たものであろう。木簡11は上下が失われているために確かなことは言えないが、私見では本人の願ひ出を受けた甲渠侯官が居延都尉府に提出した上申文書の一部ではないかと考えてい

る。そして反対に貧寒なるを以て免職させられている事実も、居延新簡によって初めて知るところとなった。すなわち

簡12 第十燧長田広 貧寒罷休 当還九月十五日食

EPF二二・二九六

簡13 第十一燧長張岑 貧寒罷休 当還九月十五日食

EPF二二・二九七

簡14 乘第十二、卅井燧長□□ 貧寒罷休 当還九月十五日食

EPF二二・二九八

簡15 乘第廿、卅井燧長張翁 貧寒罷休 当還九月十五日食

EPF二二・三〇一A

簡16 第廿泰燧長薛隆 貧寒罷休 当還九月十五日食

EPF二二・三〇二

簡17 □□恭 貧寒罷休 当還九月□□ EPF二二・三〇三

右の六枚は全て同筆であり、発見場所のF二二は甲渠侯官の文書収蔵庫址であることから冊書で保存されていたものと見られる。いずれも貧しいことを意味する貧寒という判定によって罷休、すなわち免職させられたものである。罷休が免職であることは、邢義田氏も指摘するように、簡16の罷休した燧長薛隆は

簡18 燧長常業代休燧長薛隆、丁卯舖時到官、不持府符・謹驗問隆

EPF二二・一七〇

の薛隆と同一人物であり、彼に代わって新しく別の燧長常業が任命されていることから知ることが出来る。このように、吏は貧寒と判定されると免職させられることが初めて明らかになったわけであるが、では右の貧寒罷休の冊書に見られる貧寒は一体何を基準に判定されたも

のであろうか。そこで想起されるのは、先に引用した景帝後元元年の詔に言うところの訾算四、すなわち資産四万銭の基準である。しかし貧寒の判定にこの基準が適用されたとは到底考えられない。それは木簡資料を見る限りではあるが、前漢後期から王莽を経て後漢の初期に至るまで辺境に勤務する吏の暮らしが豊かであったとは、必ずしも言えないからである。

居延漢簡は、漢代辺境に勤務する吏卒の経済生活の実態を知る上でも極めて貴重な史料である。中でも注目されるのが貰売（掛け売り）、貰買（掛け買い）に関わる文書や記録の存在である。従来よりこれらの史料を用いて漢代辺境の吏卒の経済生活についての研究が行われてきたが、その一つに角谷常子「居延漢簡にみえる売買関係簡についての一考察」、『東洋史研究』五二・四、一九九四年）がある。角谷氏は、この論文中に売手（債権者）と買手（債務

者）、取り引き商品とその金額を記した一覧表を掲載している。そこでこの表を借用し、債権者と債務者および物品名等の三者が明らかな事例を抽出して表示したのが、吏卒の貰売表である。なお表中の番号は角谷論文中的一覧表の通し番号、（ ）内の数字は金額である。

番号	債権者	債務者	物品名ほか	簡番号
1	燧長	亭長	舍銭（2330）	3. 4
2	燧長	亭長	茭	3. 6
3	卒	令史	裘1（750）	26. 1
4	候長	卒	馬（9500）	35. 4
5	卒	燧長	阜練（1200）	35. 6
8	卒	燧長	鶉縷（1000）	112. 27
11	民	燧長	繒布	132. 36
16	卒	燧長	縑1丈（360）	217. 15 = 19
17	卒	燧長	布複袴、複襦	25. 17
18	卒	候史	劍（650）、裘（380）	258. 7
19	候史	卒	阜布章単衣（353）	262. 29
21	卒	民	九稷曲布3匹（1000）	282. 5
23	卒	民	八稷布1匹（290）	287. 13
24	卒	民	八稷布8匹（1800）	311. 20
25	卒	燧長	官袍（1450）	甲附 22
28	卒	卒	長襦	EPT 51. 8
30	令史	燧長	粟3石	EPT 51. 70
31	卒	民	劍（800）	EPT 51. 84
32	卒	候史	縹複袍（1100）	EPT 51. 122
35	卒	民	糸絮（300）	EPT 51. 249
37	卒	嗇夫	布	EPT 51. 329
41	燧長	燧長	茭（600）	EPT 52. 88
42	卒	燧長	衣物銭（計5100）	EPT 52. 110
43	尉丞	候長	牛（3500）	EPT 53. 73
45	卒	候長	袍、襲	EPT 56. 9
46	卒	民	七稷布3匹（1050）	EPT 56. 10
51	卒	燧長	鉄斗（90）、刀（30）、縹縑（25）	EPT 59. 7
54	卒	燧長	粟7斗、阜布4尺	EPT 59. 114
56	卒	燧長	練襦（830）	EPT 59. 645

吏卒の貰売表

角谷論文でも指摘していることであるが、この表を見る限りにおいても、債権者が卒で債務者が吏というケースが二九例中の一四例と圧倒的に多いことが知られる。またその際の取り引きの物品としては裘（かわごろも）、袍（わたいれ）、襲（うわぎ）、袴（ズボン）、襦（はだぎ）などの衣類と、練や縹や布などの帛布の類が大部で、他には剣や刀や鉄斗、粟までが対象となっている。また金額は最高で五一〇〇銭、最低で一四五銭、平均すると一件当たり約一三〇〇銭である。当時の吏の月俸を見ると、候長で一二〇〇銭、燧長や令史や候史で六〇〇銭、九〇〇銭であったから、この金額は候長でおよそ一か月分、燧長などでは二か月分の月俸に相当する。

漢代、辺境に勤務する吏卒のうち、卒の多くは内郡の出身者である。これにたいして候長や燧長など百石以下の少吏は現地辺郡の出身者である。そして卒には食糧としての穀物や衣服や武器が官給されるほかに、出身地の内郡から送られてくる銭や私物の衣類がある。他方、吏には月俸と食糧が官給される以外、他は全て自弁である。吏卒の貰売表で見たように卒が債権者で吏が債務者となるケースが圧倒的に多いのは、正に裕福な卒と貧窮した吏の対照的な姿を浮き彫りにしていると言ってよい。貰売に関係した文書や記録の作成過程についてはなお不明な点があり、また資料の残存する度合いについても問題がないわけではないが、当時の辺境の吏の経済生活の大体は窺い知ることが出来るであろう。そうであればこそ、居延漢簡中に見える「部吏多く貧急す」（EPT五九・五六）とか「貧急にして自ら給すること能わず」（EPT五八・三〇）とか、また「今、騎士は皆穀三石を出し、以て寒吏に食わす」（EPT六五・五三A）といった記事が、現

実のこととして迫ってくるのである。

以上述べてきたことから思うに、吏になるためには何らかの資産があることが条件であったことは疑いないが、しかし先の簡12、簡17の如き貧寒罷休の吏は、景帝の後元二年の詔にある資産四万錢以上の吏とは到底考えられない。詔で意識して対象としている吏は勅任官の長吏であって、決して百石以下の少吏を対象としたものではなく、したがって少吏の貧寒罷休の判定は資産というよりは、むしろ現実に吏として当然具有すべき衣服や武器を欠くような状態に陥ったことが明らかにになった時点において、行われたものと考ええる。ではその時期は何時であったのか。

そこで貧寒罷休の判定の時期を考えるに当たって今一度、簡12、簡17に目を向けてみたい。そこには各人に共通した「当還九月十五日食」の文言が見られる。ここに言う「当に還すべし」とは、既に支給されている食糧としての穀物を返還せよという意味である。食糧は前月の月末か或は当月の初めに、一か月分が支給された。

簡19 止害燧卒孫同 二月食三石三斗三升少 正月乙酉自取

二七・一一

簡20 第六燧長皇隆 正月食三石 正月辛巳自取

EPT二二・八三

簡19は二月の食糧を前月の正月中に受取った例、簡20は正月の食糧を当該月の正月に受取った例である。そして吏の罷休が決定し、それが月の前半月内のことであれば、支給済みの後半月分すなわち半分を返還しなければならなかったことは、次の木簡から知られる。

簡21 貧寒燧長夏□等罷休、当還入十五日食石五斗、各如牒、檄到

□付 E P F 二二・二九四

これは燧長で食糧の月額三石の場合であるが、貧寒と判定された燧長の夏□らが免職になり、既に支給されていた食糧の半月分すなわち一石五斗の返還を命じた書檄の一部である。支給済みの半月分であるから後半月の食糧でなければならず、その返還を命じていることからして、貧寒の判定は当該月の十五日もしくはそれ以前であったことは間違いない。この簡21を参考にして先の貧寒罷休の冊書を考えると、「当還九月十五日食」とは、九月十五日もしくはそれ以前に貧寒によって免職になったために、既に支給済みの九月の後半十五日分の食糧の返還を命じたものと解される。ここで考えられるのは、漢代では九月が会計年度末に当たっており、それに合わせて吏の考課すなわち勤務評定が行われたことである。

簡22 甲渠言、謹驗問尉史張詡、燧長張宗嘗産、詡宗各有大車一輛、用牛各一頭、余以使相□ E P F 二二・六五七

これは甲渠候官長である甲渠鄭候の責任において所属の尉史の張詡と燧長の張宗の嘗産を調査し、その結果を報告した上申文書の一部である。私見では、先に取り上げた累重嘗直官簿や伐閼嘗直累重官簿の作成の時期は少なくとも二回あったと考える。一つは今問題にしている年度末である。すなわち年度末になると候官長の責任で所属の吏の資産調べが行われ、それが考課の資料の一つとして吏の任免に利用されるとともに、その際に家族構成や経歴も併せて記録された。二つ目は罷免も含めて広く吏の任用全般に関わる時期である。そこで今、改めて該簿の作成月を見てみると簡3は二月、簡4は五月、簡5は六月、簡7は四月とあって、知り得る史料を見る限りでは、いずれも年

度の中間月ばかりである。このことは該簿が吏の任用に関係する時期に作成されると見る有力な証拠になるが、果たしてそうとのみ考えてよいであろうか。貧寒罷休の冊書は年度末の作成に違いないと見るが、年度末には全く作成されなかったのであろうか。該簿の作成時期については疑問が残るが、これは将来の課題としたい。

以上、吏の任用と資産について縷縷述べてきたが、では何故吏となるには資産が必要であったのか。最後にこのことを述べて締め括りとする。先に引用した景帝後元二年の嘗算減額の詔の応劭の注に、「古は吏の食を疾む、衣食足りて榮辱を知る」とある。「衣食足りて榮辱を知る」とは、言うまでもなく『管子』牧民篇に見えることばで、衣食すなわち着ることと食べることが十分に足りて生活に何の心配もなくなれば、おのずと名誉を重じ恥辱を知るようになる、という意味である。吏の任用に際して資産のあることを条件とする背景には、先ずこのような中国古来の伝統的な思想があった。同時に吏は民の師表となるべき者であり、身分相應の身繕いをしなければならないという思想もあった。『漢書』五、景帝紀の中元六年五月の詔に、次のように見えている。

夫吏者、民之師也、車駕衣服宜称。吏六百以上、皆長吏也。亡度者或不吏服、出入閭里、与民亡異。令長吏二千石車朱兩轎、千石至六百石朱左轎。車騎從者不称其官衣服、下吏出入閭巷亡吏体者、二千石上其官属、三輔举不如法令者、皆上丞相御史請之（夫れ吏たる者は、民の師なり、其の車駕・衣服は宜しく称うべし。吏六百石以上は、皆長吏なるも、度亡き者或は吏の服にあらずして、閭里に出入し、民と異る亡し。長吏二千石をして車は兩轎（車の両側のおお

い)を朱にし、千石より六百石に至るまでは左轡を朱にせしむ。車騎の従者にして、其の官の衣服に称わず、下吏の閭巷に出入して吏の体の亡き者は、二千石は其の官属を上まつり、三輔は法令の如からざる者を挙げ、皆丞相御史に上まつりて之を請え)

民の模範となる吏は身分相応の車に乗りかつ衣服を着用すべきことを命じ、違背した者は罰するとしたこの景帝の詔は、『漢書』によると、当時吏は軍功があっても車や衣服が粗末で軽薄であったために発布されたと言う。このような吏としての威厳を保つために調達される車や衣服は、全て自弁であった。いずれにしても資産が無ければ吏にはなれなかったのである。

むすびにかえて

居延旧簡の釈文公刊時からいち早く注目され、その内容とともに史料の性格が論議されてきた礼忠簡と徐宗簡は、本論で考察した如く居延新簡の発見によって累重警直官簿を構成する簡であることが判明した。また累重警直官簿は伐閼警直累重官簿の如く伐閼簿とセットになっていることから、それは吏の身分や資格更には吏の任用に関係のある身上記録であったことが明らかになった。このように居延新簡の発見によって、礼忠簡と徐宗簡の性格が明らかになったことは、大きな収穫であった。しかし長年の疑問が解決を見た反面で、新たな疑問や問題もまた生じてきた。本論中で述べたところであるが、たとえば累重警直官簿や伐閼警直累重官簿が吏の資格や任用に関係があるとすれば、この簿書は何時の時点で作成されたかという簿書作成時期の疑問がある。また辺境の吏に見られる貧寒罷休となる条件は何だったのか、関連して景帝の詔の資産四万銭は辺境の吏には適用されなかったと考えたが、では彼らが任用される際の資産の規準は何であったのかといった疑問がある。これらは歴史事実についての疑問であるが、他方木簡の集成という面でも大きな問題を抱えることになった。と言うのは、本来木簡の大部分は紐で上下を編綴した冊書として使用されたものである。それが歳月を経るうちに紐が朽ちて木簡はばらばらになり、かつ簡は切断されて今日見るものの殆どが断簡である。このような断簡を有効かつ正確に利用するためには、可能な限り本来の冊書の姿に復原する作業が必須であった。筆者もかつて帳簿を対象として取り上げ、表題簡に基づいてかなりの数の簿書の復原を試みてきたが、その際に原則としたのは一事一簿、すなわち一つの内容について一つの簿書が作成されているとした。ところが今回、伐閼警直累重官簿が発見されたのである。累重警直は礼忠簡と徐宗簡が該当するとしても、それに伐閼が付加した伐閼警直累重官簿とは一体どのような様式を備えていたのか。別に伐閼簿が単独で存在することから、それは累重警直簿に伐閼簿を足したものなのか、それとも全く様式を異にする今まで見たことのない簿書なのか。木簡整理の基本である集成作業の上でも、新たな問題を抱え込むことになったことは確かである。

新資料の発見が問題を解決する一方で、新たな疑問や問題を生み出す。それが木簡研究のもつ宿命であり、また難しさでもある。

註

- ① 居延旧簡の簡番号である。以下同じ。
- ② 米田賢次郎「居延漢簡とその研究成果」(『古代学』三一、一九五四
年)。宇都宮清吉「僅約研究」(『名古屋大学文学部論集』第五、史学第

- 二、一九五三年。同氏『漢代社会経済史研究』所収。佐藤武敏「漢代の戸口調査」(『集刊東洋学』一八、一九六七年)。楠山修作「漢代の賦の意味について——平中説批判——」(『和歌山県高等学校社会科学科研究協会会報』二一、一九六八年。同氏『中国古代史論集』所収)。
 - ③ 居延新簡の簡番号である。以下同じ。
 - ④ 累重警直官簿および後述の伐閼警直累重官簿等については邢義田氏が「從居延漢簡看漢代軍隊的若干人事制度」(『新史学』三一、一九九二年)に取り上げている。併せて参照されたい。
 - ⑤ 官簿は、翟方進伝の記事から後述する伐閼簿を指すと見ることも出来るが、しかしこれまた後に挙げる簡4と簡5の史料では伐閼と官簿が併記されており、ここでは官簿は個人の記録簿と理解しておく。
 - ⑥ 大庭脩「漢代における功次による昇進について」『東洋史研究』一二—三、一九五三年、同氏『秦漢法制史の研究』所収。なお近年の注目すべき功勞の研究に佐藤達郎「功次による昇進制度の形成」(『東洋史研究』五八—四、二〇〇〇年)がある。
 - ⑦ 注④を参照。
 - ⑧ 吏の月俸については陳夢家「漢簡所見奉例」(『漢簡綴述』中華書局、一九八〇年)、佐原康夫「居延漢簡月俸考」(『古史春秋』五、一九八八年)を参照。
 - ⑨ 一般的には鎌田重雄「郡国の上計」(『秦漢政治制度の研究』所収、日本學術振興會、一九六二年)で知られるところであるが、居延漢簡でも年度末になると吏にたいして弓射の試験——秋射という——が行われて勤務評価されていたことが知られている。注⑥の大庭論文を参照。
 - ⑩ 拙書『居延漢簡の研究』(『東洋史研究叢刊』四一、同朋舎、一九八九年)の第一部。
- (本論文は一九九五年東洋史研究会大会において「礼忠簡と徐宗簡再論」と題して発表した内容に加筆したものである)

侯長
 縣得廣昌里公華禮
 小紅二八五三
 九四二八二第
 廣二二第
 明五五五二第
 牛華三兩五第
 明二二第
 地一區第
 田五區五第
 元第立五第

图 1

侯長
 縣得廣昌里公華禮
 小紅二八五三
 九四二八二第
 廣二二第
 明五五五二第
 牛華三兩五第
 明二二第
 地一區第
 田五區五第
 元第立五第

图 2